

二〇二〇年度

## 入学試験問題

# 国語

### 注意

- ・指示があるまで開いてはいけません。
- ・答えは解答用紙に書きなさい。
- ・本文は、問題作成上、表記を変えたり省略したりしたところがあります。
- ・記号がついているものはすべて記号で書き入れなさい。
- ・句読点や「」も一字とします。
- ・試験中は横を向かないこと。早く終わっても周囲を見まわしたりしないこと。そのような場合には注意されることがあります。

一 次のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) 文章のテイサイを整える (2) 国民のギム  
(4) 条約にシヨメイする (5) 判断をユダねる  
(6) (3) 飛行機のソウジユウ  
運動会がエンキになる

二 次の詩を読み、あとの問いに答えなさい。

こどもたち 茨木のり子

〔ア〕

こどもたちの視るものはいつも断片  
それだけではなんの意味もなさない断片  
たとえ視られても

〔A〕おとなたちは安心して  
なんにもわかりはしないさ あれだけちや

〔B〕

それら一つ一つとの出会いは  
すばらしく新鮮なので  
こどもたちは永く記憶にとどめている  
よろこびであったもの 驚いたもの  
神秘なもの 醜いものなどを

〔イ〕

〔C〕青春が嵐のようにどつと襲ってくる  
こどもたちはなぎ倒されながら  
ふいにすべての記憶を紡ぎはじめ  
かれらはかれらのゴブラン織を織りはじめ  
おとなたちにとって

〔ウ〕

①ゆめゆめ油断のならないのは  
なによりもまづ まわりを走ること  
今はお菓子ばかりをねらいにかかっている  
この栗鼠どもなのである

〔エ〕

(1) 次の連は〔ア〕〔エ〕のどの位置に入りますか。

その時に  
父や母 教師や祖国などが  
海蛇や毒草 こわれた甕 ゆがんだ顔の  
イメージで ちいさくかたどられるとしたら  
それはやはり哀しいことではないのか

(2) 詩中に用いられている表現技法であてはまらないものを答えなさい。

ア 擬人法 イ 倒置法 ウ 比喩 エ 対句 オ 体言止め

(3) 〔A〕「おとなたちは安心して」ことを一語で言いかえた言葉を詩中から書きぬきなさい。

〔B〕に入る語を答えなさい。

ア だから イ そして ウ しかし エ あるいは オ ただし

(5) 〔C〕「青春が嵐のようにどつと襲ってくる」とありますが、どういうことですか。  
ア おとなになるにつれて、今まで経験していなかったような体験をするということ。  
イ 今までの経験で学んだことや感じたことが頭の中で一気に思い出されるということ。  
ウ たとえこどもでも、嫌なことや悲しいことが起きてしまうこともあるということ。  
エ 心を動かすような激しくも力強い言葉をかけられ、感性が豊かになるといこと。

(6) 〔D〕「ゆめゆめ」の意味を答えなさい。

ア 少し イ もっと ウ 全く エ おそらく

\*ゴブラン織：フランスの織物の一種

(茨木のり子 『茨木のり子詩集』 岩波文庫)

(7)

——⑤「栗鼠ども」と表現されている理由を答えなさい。  
ア こどもたちが目の前のことに夢中になるかわいらしさを強調するため。  
イ おとなたちがいかにこどもたちのことを侮あなごっているかを強調するため。  
ウ おとなたちがこどもたちに対して抱いだく恐きょう怖ふ心や不信感を暗に示すため。  
エ こどもたちがいつでもおとなの言動に不満を抱くことを暗に示すため。

三 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

食物に甘さや辛さがあるように、人間にも甘さと辛さがあるようである。

①学校の先生が点数をつける時の甘さ辛さは、ある程度までその先生の人間の甘さ辛さを反映しているようである。

学生の身になって見ると、予測していたより良い点数をつけてくれた先生には何となく好感を持つだけでなく、その課目が好きになり、よく勉強するようになる場合が多いから、どちらかといえば、点の甘い方が教育的効果は大きそうに私には思える。

ところがこういう風に思えるということ自身が、甘い人間である証拠であるかも知れない。反対に勉強しなくても、良い点をつけてくれるから、サボってやるうという心掛の学生も相当あり得るのである。本当に学生のためを思うなら、自分の実力をきびしく反省させる機会を与える方が正しいという考え方もあるであろう。

しかし私の今までの経験では、叱って反省さすことによってよくなる場合よりも、ほめて奨励することによってよくなる場合の方が多いようである。一々の場合によっていろいろ違うにしても、統計的に見ると、甘すぎる方が辛すぎるよりも結果はよさそうである。

一つの社会を構成する人間の皆が仲好く気持ちよく暮して行くためには、各人がそれぞれある程度の甘さを持つている必要があることは確かである。お互いあまり批判的すぎる社会は居心地が悪い。

しかしどういいう社会にも危険性はある。例えばその中のある一人、またはある一部のグループの勢力が不当に増大し、自分勝手なことばかりするとか、あるいは常軌を逸した危険な行動をするような事態に立ちいたる危険性はどのような社会にも潜んでいる。こういう危険を予め防ぐためには、各人がある種の辛さを保持していることが必要である。②私人としては甘くても公人としては辛くな

ければならないということが時々起ってくる。人間の辛さの全然必要でないような社会は天国以外にはないかも知れない。一人一人の人間を取って見ても、一生③だけで無事に暮せる人はよほど運のいい人である。そういう場合もたいてい誰かが代りに④を引きうけているのである。

私も科学者というものは気難しくて、⑤よりも⑥の目立つ人達だと思われがちのようであるが、それも必ずしも当てていない。⑦学者にも甘さと辛さの両面が必要である。非常にすぐれた学者、特に学問の進歩に建設的な役割を果した学者には、必ず⑧ある種の甘さが見出されるのである。

辛さばかりが勝つと人の仕事に対して批判的になりすぎて、うまくゆけば物になる研究の芽ばえを摘んでしまうおそれがあるばかりでなく、自分自身の中にある可能性までも押えてしまうことがある。学問が飛躍的な進歩をする時には、誰かが今まで思いもかけなかった新しい考えを思いつくとか、新しい物事を見つけたすとかいうことがきつかけとなっている。私どもの持っている既成の概念や知識と相容れないようなものを受け入れる気持を私どもが持っているなければ、自分の心の中で、あるいは他の人の心の中で成長すべき新しい大切なものが萎んでしまっておそれがある。そこで甘さというか包容力というか⑨\*オープンマインドネスというか、そういうものが私ども学者の気持、学者の平素からの心構えとして大変大切になってくる。そういうものが実際すぐれた学者の中にはどこかに見出されるのである。

\*オープンマインドネス：偏見なく新しいものを受け入れる広い心

(湯川秀樹『詩と科学』平凡社)

(1) ———— ㉠ 「学校の先生が点数をつける時の甘さ辛さ」とありますが、学校の先生が辛く点数をつける目的は何ですか。「くため」に続くように、本文中から二十一字で探し、はじめの五字を書きぬきなさい。

(2) ———— ㉢ 「私人としては甘くても公人としては辛くなければならない」とありますが、どういうことですか。

ア 他人の言動に対しては寛容な心で受け止めるべきだが、限度を超えないように働きかけてもらえる第三者がいなければならぬということ。

イ 他人の言動に対して批判的になりすぎない方がよいが、限度を超えたときにはそれを指摘できる辛さを持つていなければならぬということ。

ウ 他人の言動に対しては寛容な心で受け止めるべきだが、自分の言動に対しては常に批判的に辛さを持つていなければならぬということ。

エ 他人の言動に対して批判的になりすぎない方がよいが、自分の言動に対してはそれが許される甘さを持つていなければならぬということ。

(3) ㉠、㉡、㉢、㉣、㉤、㉥、㉦ には「甘さ」、「辛さ」のいずれかが入ります。

「甘さ」が入るものをすべて選び、アルファベットで答えなさい。

(4) ———— ㉧ 「学者にも甘さと辛さの両面が必要である」のはどうしてですか。

ア 学問の飛躍的な進歩にはある種の諦めが必要で、諦めがないと研究の芽生えを摘んでしまうおそれがあるから。

イ 研究ばかりしていると視野が狭くなるので、たまには息抜きをして頭をリフレッシュさせる必要があるから。

ウ 自分とは異なる他人の考えを受け入れることで、これまでにない新しい考えが浮かんでくることがあるから。

エ 自分自身の可能性を広げて新しい考えを生み出すためには、他人の考えに対して批判的になる必要があるから。

(5) ———— ㉨ 「ある種の甘さ」を別の言葉で言いかえた一語を本文中から漢字三字で書きぬきなさい。

(6) 本文の内容と合っているものを答えなさい。

ア 点数を甘くつけることで学生はより意欲的に勉強するようになるので、評価に辛さは全く必要ない。

イ 人々が甘さを持つことで社会の居心地は良くなるが、急に訪れる天災に対応できなくなってしまう。

ウ 様々な人が暮らす社会において辛さはお互いを抑制し、暮らしやすい環境を作るために必要である。

エ 甘さや辛さは心と密接につながっており、甘く考えることで大衆にわかりやすい研究が可能になる。

四 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

人と本とのかわりは、読む以前に出会う段階から始まっている。私自身は、仕事として日々大量の出版物に接してきたので、書物に対する特別な思い入れのようなものはできるだけ持たないようにしているが、それでもやはり「本に呼ばれている」とか、「棚に見透かされている」とか感じることもある。勤めをやめてからは、職業ではなく研究対象として、人が本に出会う構造や機会ということを調べたり考えたりしているのだが、人がどのようにして本に行きつくのかというテーマは、それほど単純ではないようだ。

目に見えるところに限っても、ここ一〇年ほどで本をめぐる状況は劇的に変わっている。いままでは、本がほしいと思えばまず書店に行き、自分で探すか店の人にたずね、なければ注文をして二週間か三週間待たされる、というのが普通だった。けれどもいまでは、インターネットで簡単に調べて、好きな方法で取り寄せることができる。届く日数も速くなったし、スペースに制約がないインターネット書店はすべての本を置いておくことができるので、町の書店にはもう並ばなくなってしまうような、しばらく前に出た本へのアクセスも格段に上がった。(中略)

こうした一連の現象は、「バリエーションもふえて便利になった」という点で、歓迎すべきなのはまちがいない。だがもうすこし注意深く考えてみると、この一〇年ほどの間のもっとも大きな変化は、ビジネスの成果ではなくて、それがもたらしたもののほうにある。つまりここで肝心なのは、本を手に入れるということが、「A」ことを意味するようになった、という点なのではないだろうか。

この新たな常識は、いくつかの場面ですでに明らかになっている。わかりやすいところでは、書店の巨大化がある。現実の書店が、まるでインターネット書店の「無限の書庫」と競り合うように大きくなってきているのだ。それだけでなく、新刊書店のなかで古書が売られているのをみかけるようにもなった。同じ本を新刊と古書の両方から選べるわけではないが、現象としては、インターネットの中に両方があると似ている。大きな書店の中には、インターネットのように検索端末も置かれている。もはや、いながらにして本を手に入れたい人も、実際に手ざわりを確かめながら買いたい人も(もちろん地域差はあるけれど)、これ

までになく整った環境で「本を選ぶ」ことができるようになっていく。

そしてさらには、「手に入らない」と思われていた本までもが対象になりつつある。「出版物のデジタル化」だ。そのひとつ「グーグル・ブックス」は、世界中の図書館や出版社を網羅して、デジタル化した書物をインターネット上から提供しようというものである。さまざまな理由で反対も多いが、すでにプロジェクトは始まっている。もしもこのもくろみが実現すれば、⑧もはや世界中の本はすべて手に入り、誰もが好きなものを自由に選べるようになる、⑨といっても過言ではないかもしれない。

そこまで行けば便利を通り越して、本が好きな人にとっては夢のような話だ。けれどもいっぽうで、こんな夢のようなことが現実起きつつあるにもかかわらず、少なくない人がどこかで不安に思い、だんだんそのことに倦みはじめていくようなのだ。いまや「すべての本」を好きなように選んで手に入れられるようになったのに、広大な本の海の前にして、まるで「たまたまタイミングが悪くて」一冊の本を買えなかった日のような、またはそれ以上の⑩心もとなさを人々が感じはじめていく。これは、いったいなぜなのか。

ややわかり道になるが、すこしだけ時代をさかのぼってみよう。そう遠くないむかし、書物の流通というものは、もつとおおざっぱに行われていたふしがある。たとえば明治のはじめ、東京の本屋と大阪の本屋は互いの本を物々交換で取引することがあった。当時はいまのように全国流通が整っていないから、土地によって作られる本も出まわる本も違っている。手持ちの本を交換するというのは、手間をかけずにバリエーションを増やす⑪なやり方だ。

またひとくちに「本屋」といっても、印刷から出版、小売に卸とさまざまな仕事をするものが含まれている。そのため、交換する荷物の中には、自分で刊行したものから、同業者の預かり本、古本、買い戻した本など、いろいろなものも混ざっている。何が送られてくるのかはお互い荷をとくまでわからないし、まして定価がついていないので、その交換が妥当なのかどうか不明である。それでも取引が成り立っていたのは、⑫の呼吸が信頼関係というものだろう。むろん物々交換だけではなく、金銭でのやりとりもあった。京阪、東京以外の場所では交換するほど数がないので、都市の本屋が品物をもってゆき、長逗留

して宿屋で市を開いた。なじみになると、適当にみつくりつつ送ったりもしたらしい。

こうした、人力（と馬力）に頼る方法では、ともかく本がある、ということが先決で、「ほしい本が手に入る」は二の次だ。それ以前に、ほしい本とは何か、世の中にどれだけの本があるか、ということでは誰もわかっていないし、そもそもわかる必要を感じていない。とくに評判の本が出たとか目的がなければ、そこにある本を読むだけである。未熟で原初的な時代といえ、そのとおりにはちがいない。だがちょっと待ってほしいのだ。そこにある本を読む、のではないだろうか。それは果たして致命的といえるほど貧しいことだろうか。

ごく単純に考えて、人が認識し、現実に見ることのできる本の量には限界がある。選べる対象がいくらふえても、こなせる量がふえるわけではない。むしろ選択肢がふえればふえるほど、選ぶのにエネルギーを費やさなくてはならなくなる。早くて便利な検索エンジンは、この問題をたやすく解決してくれるかのように見えるが、時間と手間が短縮されたからといって余裕が生まれるとは限らない。にもかかわらず、知らないうちに「すべての本の中から（最適なものを）選ぶ」ということだけが、無条件によいこととしてスタンダードになっている。

いかに「すべて」を網羅して「最適」なアルゴリズムを設計するか、が問題になっている。けれども、ほんとうは⑤どう考えても「すべての本」を見ることができないし、人間がそこから「最適な一冊」を選びとることなどはしなない。それにどういいう回路を経てきたとしても、一冊の本が一冊の本でしかないのなら、手の届く範囲でめぐってきた本を読むことと、何万、何億という書物のなかから最適として選り出されたものを読むことに、どれほどの違いがあるだろうか。学者なら話は別だが、ふつうの人生を送っている人が、限られた時間のなか

でたどりつかねばならない、最適な本とはいったい何だろう。その一冊を「すべて」の中から選ばなければいけない理由は、いったいどこにあるだろう。

世の中に不要な本があると云っているのではない。すべての本に行きつく回路は、いうまでもなく開かれていたほうがよい。だが見果てぬ夢を手にした人々があまり幸せそうにみえないのは、喧伝される自由がそれほど楽しくないからだ。本を選ぶのはただでさえ大仕事なのに、「すべての本」からとなれば疲れるのは当然だ。検索エンジンを使って、あたかも自分の手で選んだかのような結果だけをスライドショーのように繰り返し続けることと、物理的に本を発見することは同じではない。⑥アルゴリズムを借りたプロセスは、自分と本の中に記憶されない。

人はさまざまなことをきっかけに、一冊の本を手に入れる。あたりを見渡せば、あらゆるところに本はある。その中で、納得できる何冊かの本とほどほどに出会える才能がありさえすれば、たとえ「すべての本」に行きつかなくても人は幸福に生きていくことができると思うのだ。

\* 倦む：同じ状況が長く続いていやになる

\* 長逗留：長い間滞在すること

\* アルゴリズム：解決するための手順や方式

\* 喧伝：盛んに言いふらすこと 世間でやかましく言いたてること

（池澤夏樹編『本は、これから』岩波新書より  
柴野京子「誰もすべての本を知らない」

(1) ㊦に入るものを答えなさい。

ア 幸福に生きていくために、必要な手立てである      イ 検索端末を駆使して、昔より効率よく選びとる  
ウ 人力や信頼関係の関与を必要としなくなった      エ 手に入りうるすべての本の中から、自分で選ぶ

(2) ㊧「もはや世界中の本はすべて手に入り、誰もが好きなものを自由に選べるようになる、といっても過言ではないかもしれない」と同じ内容を言っている表現を、この部分より後ろの本文中から五字で書きぬきなさい。

(3) ㊨「心もとなさ」の意味を答えなさい。

ア 心配      イ 混乱      ウ 疑問      エ 失望

(4) ㊩に入る語を答えなさい。

ア 楽観的      イ 抜本的      ウ 合理的      エ 実践的

(5) へ      ㊪にひらがな三字を入れ、      ㊫で「互いの気持ちがあびたりと合うこと」という意味の慣用表現にしなさい。

(6) ㊬「どう考えても「すべての本」を見ることなどできない」と、筆者が言える根拠は何ですか。その理由を「くから」に続くように本文中から二十七字で探し、はじめの五字を書きぬきなさい。

(7) ㊭「アルゴリズムを借りたプロセスは、自分と本の中に記憶されない」とありますが、どういふことですか。

ア 手の届く範囲でめぐってきた本が持つプロセスが必ずしも最適だとは限らない。

イ 自分で書店に行く時間と手間を省く検索システムは、予想に反して骨が折れる。

ウ 物理的に本を発見すると、たどり着くまでの回路が自分の中に刻み込める。

エ 検索システムで選んだ書物は、実際に自分の目と手で選んだ書物よりも多い。

(8) 本文の内容と合っているものを答えなさい。

ア すべてのの中から最適な本を選ぶことが無条件によいことなので、検索エンジンはこれからも欠かせないだろう。

イ 人を介して本が流通した時代、今よりも格段に限定されていたのは事実だが、人々は不安に感じなかった。

ウ 現在、少なくとも人々が手放して喜べないのは、読書の時間を日々の生活から捻出することができないからだ。

エ 実際に書店で手ざわりを確かめながら本を選んだ方が、自分にとって最適な一冊にめぐりあう可能性が高い。



五 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

幼稚園の先生になって一年半の「私」は、園では「えな先生」と呼ばれている。園には「ネイル禁止」という暗黙のルールがあったが、9月のある日「私」はネイルを落とし忘れて出勤してしまった。しかし翌日からはある「理由」でネイルをつけて出勤すると…

「事務室に来て」

閉園の後、片付けをしていたら泰子先生が私の耳元でほそりと言った。金曜日の夕方のことだ。同僚数名から心配と好奇の混ざった視線で見送られつつ、私は泰子先生の後についていった。

泰子先生は勤続15年のベテランで、「化粧をしない先生」だ。眉毛さえ描かない。顔立ちは整っているから、メイクしたらけっこう美人なのと思う。だけど彼女にしてみれば大きなお世話だろう。いつもで、私は最初からなんとなく彼女に好かれていないだろうなと感じていた。事務室でふたりになり、ドアを閉めると泰子先生は言った。

「あなたねえ、手、見せてごらんなさいよ」

前置きもなく、第一声、それだった。言われるまま右手を差し出すと、泰子先生は乱暴に私の指をつかんだ。

「何考えているの、ネイルなんかして！」

そう言い放つと、今度は汚いものを捨てるように私の手をはらう。「添島瑠々ちゃんのお母さんから苦情がきているのよ。あなたのせいで、瑠々ちゃんが爪にマジックを塗って困るって。あなた、子どもたちに、お店に行かなくても自分で簡単にできるって言ったらしいわね。どうしてそんなけしかけるようなことするの」

そういえばさつき、瑠々ちゃんのお母さんとすれ違った。私が挨拶したら、ふいっと顔をそむけられたっけ。彼女がよくきているボーダーシャツの後ろ姿を私は思い出す。

「けしかけたわけじゃ……」

「言い訳しないで。他のお母さんたちだって気づいているわよ。あなただけじゃなくて園全体の印象が悪くなるのよ？」

私は奥歯をかみしめた。そんなふうに頭ごなしで私が悪いと断定されたら何も言えない。黙っていると、泰子先生は勝手に話を進めていく。

「仕事が終わったら彼氏とデートとかでオシャレしたいんだろうけど、仕事は仕事、**①**は**②**できつちり分けないとだめだよ」

違う。ぜんぜん違う、違います。否定しようとして、やめた。泰子先生は常に自分が正解なんだろう。話しても無駄な気がした。私だって、自分なりに一生懸命に仕事に取り組んでいる。でも、**③**私がどうしてネイルを取らなかったか、その「理由」をどう説明すればいいのかわからなかったし、私にはそれが正解なのかも自信がなかった。

「とにかく、ネイルは取りなさい」

「……わかりました」  
やつのこととそれだけ言い、私はぎゅっと拳を握った。ピンクの爪を隠すみたいに。

その夜、これから幼稚園で働くことの「理由」が見いだせなくなった。「私」は、以前から憧れていたこの「マコちゃん」が留学し、今では英語講師をしていることを思い出す。そして自分も幼稚園を辞め、外国へ行って自分の好きなことをしようかと考えたりもした。

萌香ちゃんが退園すると園長から聞かされたのは、10月も半ばに差しかかったころだ。

お父さんの急な転勤で、来週には引越すという。

「えな先生」

お迎えのとき、萌香ちゃんのお母さんから呼び止められた。普段口数が少なく控えめな彼女から、声をかけられたのは初めてだった。

「萌香がお世話になりました」

「……萌香ちゃん、お引越ししちゃうんですね」

「ええ」

ほんの少し間があつて、何か言わなくてはと思ったところでお母さんが口を開いた。

「えな先生、萌香ね、爪噛みが治ったんですよ」

お母さんが静かな笑みをたたえて言う。

「あの子、前は指の爪をぜんぶ噛んでしまつて、ひどいときは血が出るくらいで……。悩みました。育児書を読むと、やめなさいと叱つてはいけなやか、愛情不足が原因だとかつて書いてあるし。こんなに大事に想つてるつもりなのにどうしてつて、まるで自分が責められているようにも思いました」

「……」

「一ヶ月ぐらい前、えな先生の爪はきれいなピンクなんだよつて、うれしそうに話してました。萌香もあんなきれいな手になりたいつて。だから爪はもう噛まなつて、自分から。ギザギザで伸びる間もなかつた爪が、今ではちゃんと揃つてます」

萌香ちゃんのお母さんは声を震わせる。私も胸がいっぱいになつて、涙がこぼれそうだった。ああ、よかった。私の願いは通じていた。私がマコちゃんに憧れたように、萌香ちゃんが私のピンクのネイルを素敵だと感じてくれたなら、爪噛みしなくなるかもしれないと思つたのだ。

「ありがとうございます」

深々とお辞儀をするお母さんに、私は

「でも、私、すぐネイル取っちゃつたから、萌香ちゃんガツカリしたんじゃないかと思ひます」

お母さんは身体を起こす。

「いいえ。萌香がきれいだと言つてたのは、ネイルを取つたあとの爪のことです」

「え？」

「泰子先生から、聞いてませんか？」

聞いていない、何も。泰子先生の名前が出てくること自体、予想外だった。

「最初はネイルをかわいいと思つたみたいで、それがきっかけだったのはたしか

です。でも、えな先生がネイルを取つたあと、泰子先生がみんなに言つたんですつて。えな先生の手は、働きの手だよねつて。たくさん笑つて、たくさん食べて、なんでも楽しくがんばつてると、えな先生みたいにきれいな爪になるよ。大人になつてから、爪に色を塗つてオシャレしたいなと思つたとき、元氣な爪だつたら素敵だよつて」

……泰子先生がそんなこと？

⑧びつくりして、何も言えなかつた。萌香ちゃんのお母さんは、自分の手をじつと見る。

「爪つて健康のバロメーターですもんね。私、しばらく自分の爪なんか見てなかつた。夫は仕事が忙しくてほとんど家にいなくて、ひとりで育児を背負つてる氣がして……キリキリしてたなあつて氣づきました。転勤先では、もつと家族一緒にいられると思うんです。私も萌香ときれいなピンクの爪になれるように、元氣で、笑顔でいたいと思ひます」

お母さんが笑つたときの目元は萌香ちゃんとよく似ている。

おかあさん、と萌香ちゃんの明るい聲がして、こちらに向かつて走つてくるのが見えた。

「さびしいわねえ、お別れなんて」

振り返るといつの間にか泰子先生がいて、私は「ひっ！」と飛び上がった。道端で突然へびに出くわしたみたいなのに、泰子先生が眉をひそめる。

「そんなに驚かなくても。挨拶しようと思つてさつきからそばにいたけど、①出て行ける雰囲気じゃなかつたから」

泰子先生は、なんだかきまり悪そうにそつぽを向き、門に向かつて歩き出した萌香ちゃん親子に目をやつた。

私は「あの……」と切り出したが、かぶせるように泰子先生は言う。

「べつに、あなたのことかばつたわけじゃないから。まあ、でも……」

泰子先生はやつと、私の顔を見た。

「がんばつていてるつていうのは、本当でしょ」

泰子先生がいつになく穏やかな口調で言うので、私は面食らつてしまった。もしかししたら、私のことを意外とわかつてくれているのかもしれない。そう思つたら、なんだかジンときた。そんな私をちらりと見ると、泰子先生は強い口調で

言った。

「だいたいねえ、ちゃんと説明してくれれば私だって頭ごなしに注意したりしなかったのよ。ふてくされた顔で黙ってないで、ちゃんと話してくれたらよかったのに」

いつものようにきつく言われているのに、威圧的には感じなかった。泰子先生自身じゃなくて、私の受け止め方が変わったからだと気づく。

「どう説明すればいいのか、よくわからなかつたんです。瑠々ちゃんのお母さんが怒るのも無理ないって思うし」

私が答えると、泰子先生はふと真剣な表情を浮かべた。

「わからなくても、話してほしい。私も経験があるの。あなたぐらいのころ、色付きのリップクリームを塗ってね。口紅ってほどじゃなかつたんだけど、子どもを抱っこした拍子に、シャツについてしまつて。男の子だったの。その子のお母さんからいかがわしいって非難されたわ」

「そんな……」

「ううん、私が悪い。だからなるべく体に色をつけないようにしてきたの。一方で、ちよつとはお化粧するのが大人の身だしなみだつて言うお母さんもいる。いろんな考え方があからね。あなたのネイルにしたつて、萌香ちゃんの爪噛み治しにひと役買ったのは間違いないと思う。でも、必ずしもいい方向に行くとは限らないし、すべての保護者さんが受け入れてくれるかはわからない。かんじんの子どもたちにとって何がいいかは、私たちがそのつど①で感じるしかないのよ」

私はうなづいた。不思議なくらい心が落ち着いていた。

ひとつひとつがライブなんだ。試行錯誤で、体当たりで、合っているかどうかわからない正解を探し続ける。毎日毎日、音を立てるように大きくなっていく子どもたち。ひとりひとりと向き合いながら、きつと私も、伸びていく。

「難しいですね。すごく大変だけど……でも、やりがいつてこういうことを言うんだなつて、わかつた気がします」

私が言うと、泰子先生は「あら、生意気」とちよつとおどけた。

「私、ずつとえな先生のこと気になつちやつて、つい厳しすぎることを言つてたかもしれないわ。あなた、私の若いころに似てるのよね」

「え」

反射的に体がのけぞる。

「なに嫌がつてるのよ！」

「嫌がつてませんよ！」

私たちは笑い合つた。そんなことは初めてだつたけど、ほんとうは私も、もうずいぶん前から泰子先生とこんなふうにしたつたよな気がする。

② ああ、見つけた、と私は思つた。

(青山美智子『木曜日にはココアを』宝島社)

(1) ————<sup>Ⓐ</sup>「心配と好奇の混ざった視線」とはどのようなものですか。

- ア ネイルまでも禁じる園側を強く非難しつつ、えな先生に同情をする視線
- イ えな先生の身を案じつつも、今回どれだけ怒られるか興味を寄せる視線
- ウ 泰子先生の様子におそれつつも、えな先生がなぜ怒られるのか悩む視線
- エ 園の雰囲気をあやぶみつつも、えな先生は怒られるべきと指摘する視線

(2) Ⓑに入る語を答えなさい。

- ア 高圧的    イ 感情的    ウ 意図的    エ 悲観的

(3) ————<sup>Ⓒ</sup>「ふいっと顔をそむけられた」ときの瑠々ちゃんのお母さんの気持ちとしてあてはまらないものを答えなさい。

- ア 「私」のことを園に告げ口した後ろめたい気持ち    イ 子どもに余計な事を教えたことを怒る気持ち
- ウ 「私」に対する意地を張った負けおしみの気持ち    エ 「私」との余計ないざごさをさけたい気持ち

(4) Ⓓ、Ⓔに共通して入る、「私的な事や時間」という意味の語をカタカナ六字で答えなさい。

(5) ————<sup>Ⓕ</sup>「私がどうしてネイルを取らなかったか」とありますが、その具体的な理由が書かれた一文を本文中から探し、はじめの五字を書きぬきなさい。

(6) Ⓖには、「言葉や話の内容がひどく乱れる様子」を表す言葉が入ります。左の空らんにはひらがなを入れ、その言葉を完成させなさい。

し
も

(7) ————<sup>Ⓖ</sup>「びっくりして、何も言えなかった」のはどうしてですか。

- ア あれだけネイルを塗ることに否定的だった泰子先生が、子どもたちにネイルをすることをすすめていたから。
- イ ネイルをしていた「私」を怒った泰子先生が、実は自分自身もネイルに憧れていることがわかったから。
- ウ 「私」のことをきつく注意した泰子先生が、「私」のいないところで「私」をしつかりほめてくれていたから。
- エ 萌香ちゃんの爪噛みを気にかけて泰子先生が、それを直すことで萌香ちゃんのお母さんまでも助けていたから。

(8) ——— ①「出て行ける雰囲気じゃなかった」とありますが、それはどのような雰囲気でしたか。

ア 本人がいないところで泰子先生を話題にして割って入ることができない雰囲気

イ えな先生と萌香ちゃんのお母さんが仲直りをして和気あいあいとした雰囲気

ウ 萌香ちゃんの変化をお母さんと二人で喜びあって盛り上がっている雰囲気

エ お母さんに会えた萌香ちゃんが満面の笑みで二人の時間を楽しんでいる雰囲気

(9) ①に入る体の一部分を、ひらがな二字で答えなさい。

(10) ——— ①「泰子先生は「あら、生意気」とちよつとおどけた」とありますが、このときの泰子先生の気持ちを答えなさい。

ア 自分が目をかけていたえな先生が、人知れず悩んでいたことに過去の自分が重なりこの先を思いやる気持ち

イ ふてくされた顔だったえな先生が、心をいれかえて苦手な保護者と上手にやりとりできたことに安心した気持ち

ウ いつまでも新人と思っていたえな先生が、いつの間にやら肩かたを並べるほど一人前の先生になっていて驚いた気持ち

エ これまですれ違いを重ねてきてしまったえな先生が、自分と打ち解け目標を持ったことをうれしく思う気持ち

(11) ——— ①「泰子先生とこんなふうに話したかった」とありますが、萌香ちゃんの件で「私」と泰子先生が心を許し合えたのはなぜですか。その理由を本文中から十四字で探し、はじめの五字を書きぬきなさい。

(12) ——— ①「ああ、見つけた、と私は思った。」とありますが、「私」は「自分が幼稚園にいる理由」を見つけました。その具体的内容を三十五字以上四十字以下で答えなさい。